

第19回、岡山芹沢文学読書会 内容報告書

■場所：倉敷市庄公民館

■日時：令和6年8月18日（日曜日）13時30分～15時30分

■課題：「神の慈愛」第8章

■参加人数 9名

■筆記者：桑田幸真

= 読書会内容 =

・8章167ページの「天理王の命という神はないんだよ」という部分について、警察の迫害を逃れるために、明治13年に中山みきの長男の中山秀司さんが「天輪王如来」をかかげて説法を説いた歴史がある。

明治16年の榊井本にかかっている「天輪王」を天理王に置き換えてみる。以下の事が書かれている。①「天理王」の命は10柱の神の総称である。②「天理王の命」を授ける対象は中山みきである。③みきの代わりにこの屋敷を「天理王の命」と名づける。

「天理王の命」とは「親様」に授けられたようであるが、親様がお断りになられたので、10柱の神の総称、又、お地場の事を指すようである。（昔の資料が少ないためはっきりとはしない）
山本信夫さんより

・軽井沢の山小屋で過ごされたときに訪ねてきた河石誠さんに、芹沢先生が「天理王の命なんて神はないんだよ」と言われて驚いた。「天理王の命」は親神様のことだと思っていた。

・神様は天理教だけの神様ではないことを再確認したと共に親様は世界の母であることが分かった。天理教が中山教になっていると書かれているが、天理教では間違いをおしえているのであろうか？

・芹沢先生はいろいろなところで「唯一の神・宇宙を創造した神」を大切にされている。天理教が中山教になっているのは、宗教団体の弊害であるだろう。親族が力を持ちすぎたのではないか。

- ・「天理王の命」とは、祖神様の事だと思っていた。
- ・長年にわたって天理教を信仰してきたが、教えてもらってきたことが間違っていたのか？
- ・教義が間違いであると、信者に悪い影響を与えてしまう。天理教では前世の因縁のために悪いことが起きているという事を言うが、これは間違いだと思う。
- ・芹沢文学を学ぶ上では、神が何を言いたいのかを意識することが大切である。
- ・宇宙を創造した神がどういうものかということを、もう一度考える必要がある。
- ・現在の天理教の教義は中山みきを神として書かれている。
- ・魂はその人間が地球で行った、善悪のエネルギーだと書いてあるが、宇宙に存在するもの全てはエネルギーであるように思う。
- ・親様は「僕の書いた教祖様が不満であるから会うように」と言われたが、光治良先生が会うために言われたのだろう。
- ・この神の書は、神様と一緒に書かれたものだ。
- ・教祖は人類の母であると書かれている。「教祖様」の中にも同じことが書かれている。現在もなお人類の母として働かれていると思う。
- ・先生は、神シリーズのテーマである、地球の救済について、最も伝えたかったのではないか。
- ・中山正善氏との付き合いは、マイナス面が多かったが、蔵書のお金を貰わなかったが、後になってみると正解であると思う。（天理教からお金を貰わなかったことが正解だった。）

以上